



YAMAGA

近代の山鹿の
偉人たち
シリーズ

026

山鹿温泉の発展に力を尽くした実業家（一八八五～一九四八）

なか はら いち べ え
中原市兵衛

明治四十三年、山鹿の旧家・中原家の養子となり、山鹿に「鹿門館」「新富本店」などの料亭を、さらに「清流温泉」「清流旅館」を経営し山鹿を当時の宿場町として大いに発展させた。さらに阿蘇坊中や天草下田の望洋閣旅館温泉など旅館業も営み、実業家として広く知られるようになる。その間、山鹿町議会議員として地方産業文化向上に貢献し、六十四歳で生涯を終えるまで一貫して観光基盤整備の一翼を担い、山鹿温泉の名を世間に広めた。

生い立ち

中原市兵衛(城戸市兵衛)は明治十八年(一八八五)一月十日に、福岡県早良郡姪浜村(現福岡市)で父城戸利平、母クマの三男として生れました。生まれつき先見の明があり、行動力にあふれ、早くから世のため人のために働くことを信念としていました。

市兵衛が二十三歳のとき明治四十一年(一九〇八)、一人で山鹿にやってきました。それは当時山鹿が福岡・久留米・大牟田・熊本・阿蘇を結ぶ中継地であり、尚かつ、江戸時代から参勤交代にも利用された「豊前街道」が通り、米をはじめとする物産の集散地として、また「湯の町」として古くから温泉がある宿場町で観光地としてもにぎわっていた山鹿に早くから目をつけていたからでした。

その頃は日露戦争が終わり、日本が戦争に勝利して世界の列強国と肩を並べるまでに至った時ではあったものの、戦勝景気が後退し、銀の相場が下落した時期でした。さらに、外国との貿易が赤字となり特に錦糸商業などが痛手をおったこと、同年十月に発布された戊申詔書(天皇による儉約令)による国民の自制などが原因で、庶民の購買力が著しく低下し、国内の商業ははなはだしく不振に陥っていました。

このような不景気のさなかに、身の丈五尺(約一五〇cm)そこその小柄ながら見るからに精悍であった市兵衛は、何も持たず何の後ろだてもなく、単身で包丁一本を持って山鹿にやってきたのです。そして彼は九日町にある山福旅館の板場で板前として料理を担当する仕事を始めたのです。

結婚と独立

青年期の市兵衛は、毎朝暗いうちから起きて、お宮参りをすませると魚市場や青果市場を駆け回り、料理用の材料を集めて旅館に帰り、

自分に任された仕事を一生懸命に雨の日も、風の朝もまっしぐらに働きました。

市兵衛の適確な市場での仕入れ方、堅実なる働き振りに目を付けた山鹿町の山福旅館の中原富兵は「この男はものになる」と考え、彼を三女の娘ミワの養子として、中原家に迎え入れたのでした。市兵衛が三十歳のときでした。

中原富兵の眼力に狂いはなく、ほどなくして市兵衛は山福旅館を辞めると、山鹿温泉西側(今の温泉プラザの西側山鹿ビルあたり)の土地に、大衆食堂兼仕出し屋の小さな飲食店(後の新富支店)を開店させました。

開店した場所もよく、市兵衛の才能と努力によって、「料理が新鮮でうまく、値段も安い。」と評判となり、すぐに有名店となりました。

※昭和三年から十年まで板場を仕切っておられた方の話によると、新富支店の賑わいは大変なものだったらしく、当時この店を出していたかき氷が五錢、蜜かけで十錢と他のお店と比べて大変安く、量も山盛りで他店とは比較にならないほどだったそうです。山鹿灯籠の夜などはお客さんがたくさん押しかけ、一晩で四十角から五十角(一角は一二五×二六〇cm)もの氷が一晩でなくなつたそうです。このため手回しの氷削機では間にあわないので、モーター付の機械を一晩中フルで運転したそうです。

店が繁盛し、波に乗った市兵衛はその後、九日町(現在の灯籠民芸館裏)に料理店の新富本店を開店させました。この新富本店は客間が完備されていること、庭園が美しい温泉の設備があること、さらには仲居さんの徹底したサービスを行うこと等により、山鹿町界隈の代表的人気繁盛店となつたそうです。

鹿門館

世間では第一次世界大戦前後の好景気に沸く中、市兵衛はこれに乗じて新富本店と同支店以外にも丸吉・静楽園と菊地川端の鹿門館の料亭・食堂を次々に買収し、さらに、清滝温泉及び清滝旅館も併せて経

営しました。

その後昭和十一年（一九三六）には鹿門館の隣の桑畑を買収して旅館清流荘を建設し、大人数の宴会を鹿門館で行って、隣の清流荘で泊まってもらうという形をとっていたそうです。

当時、鹿門館の人気は大変なもので、東京・京阪神・福岡・大牟田・熊本方面からの観光客、旅客の多くはこの鹿門館に集中し、政府の高官、実業家等も山鹿に来たときは必ず鹿門館を指名していたそうです。

こうして市兵衛は鹿門館・山鹿温泉の名を天下に知らしめていくこととなりました。まさに中原市兵衛全盛の絶頂期であったと考えられます。



昭和初期（1930年頃）の鹿門館の玄関

※絶頂期にあった中原市兵衛は、このころ福岡の九州鉄道（今の西日本鉄道株式会社）と組んで山鹿清遊のバスツアーを企画したところ、これが大当たりとなり、福岡、大牟田から連日バスで観光客が押し寄せたそうです。これは今日のバック旅行の先駆けであったようです。また、バスが鹿門館に着けば女中さん達がズラリと玄関先に並んで出迎える送迎の様子も今では常識となっていますが、この鹿門館が始まりといわれています。当時としては破天荒な企画であったようです。一流の料亭に泊まって、お湯に入り、飲んで歌って二食・酒二本がついて三円〜五円と格安だったことも繁盛した理由でした。

※当時の旅館の部屋は、襖のみで仕切られており、各部屋には浴室などはなかったのですが、当時、九日町にあった静楽園は一室ごとに壁で仕切られていて、それぞれの部屋に浴室がついており、当時は画期的な旅館だったといえます。

この時代の政治家、実業家、学界の大物が山鹿の鹿門館に来ては驚き喜んだのは数限りがない程であったようです。昭和初期に鹿門館が増築されたことにより客間は総建坪二五〇坪（八二六㎡）の二階建て、約一〇〇畳敷きの大宴会場と数十の客室を備えた壮麗豪華な建物となりました。さらに旅館で出された料理は鮎・鯉・うなぎ・亀などの川魚を中心としてでなし、どれも生き生きとして新鮮そのものであつ

たため、お客を大変満足させたと言われています。

※当時、板場を仕切っていた人の話によると、毎日百人分の会席料理は普通であり、時には二百〜三百人分を作ることがあって、板場は戦場のようだったそうです。それでも、頑張ったのは、旅館に活気があり、雰囲気が大変よかつたため、乗り切ることが出来たそうです。

※熊本出身で東京農業大学学長であり農学博士であった横井時敬がかつて山鹿に講演で訪れたとき、夏真っ盛りの猛暑であったために「鹿門館が涼しいのでここに泊まりたい。」と言い出しました。当時鹿門館は料理屋で旅館ではなかったため泊めるわけにはいきませんでした。市兵衛は持ち前の男気で、宿泊する一日間限り料理屋を廃業する届けを直ちに警察署に届け出て、横井博士を宿泊させたそうです。

他にも、中野正剛（福岡市出身のジャーナリスト・政治家）が山鹿に来て出身校である早稲田大学の同窓会を開催したとき、宴会費が不足するのを見て、市兵衛は持ち前の男気を発揮して、中野正剛歓迎の宴会費用を一人で負担したというエピソードも残っています。

また、市兵衛が町議会議員をしていた頃、特に大正時代から昭和の初めの戦争が激しくなってきた頃、内閣大改造のために警察官や県の職員が仕事を解雇されていたのを見て、仕事をなくした人々を鹿門館の事務職員で雇って救済したそうです。

田舎の湯治場であった山鹿市を一躍、九州のリゾート地として有名にすることができた市兵衛は、さらに阿蘇の坊中、天草の下田に温泉を掘り、下田には旅館の望洋閣を建設し、中原市兵衛は熊本県以外でもその名をとどろかせていきました。



清滝温泉外観

戦争の影響

しかしながら、市兵衛も時の流れには勝てなかったようです。昭和十二年（一九三七）の盧溝橋事件に始まった日華事変（日中戦争）、その後の太平洋戦争により、日本はもう旅行どころではなくなり、あらゆる物資が厳重な国家統制のもとにおかれました。

宴会をしようにもお酒がない。料理の材料もない。ましてやドンチャ

年表 History

昭和三年 (一九二八)	大衆食堂兼仕出し屋の新富支店を開業
大正八年 (一九一五)	中原富兵の三女ミワと結婚
大正三年 (一九一四)	第一次世界大戦が始まる。
明治四十三年 (一九一〇)	三月六日、八千代座の創立委員会が鹿門館で行われる。その年末、八千代座が落成
明治四十一年 (一九〇八)	十月 戊申詔書が出される。
明治三十七年 (一九〇四)	日露戦争が起きる (一九〇五)
明治十八年 (一八八五)	一月十日、福岡県早良区姪浜村にて父城戸利平、母クマの三男として生れる。

ン騒ぎでもやるものなら警察の目が光っており、そのようなことが出来るような世間の雰囲気ではありませんでした。贅をつくした清流荘も鹿門館も、もはやどうしようもなくなり、やがて軍に接収されて軍需工場の寮に転用されました。このことは事業を命としてきた市兵衛にとって、たいへん衝撃的なできごとでした。商売の才能がありながらもめぐりあわせが悪く、望みがかなわなくなってしまったことで、体を悪くし、衰弱していききました。

不遇のなか胃がんを患った市兵衛は晩年、鹿門館を平井太郎(当時の参議院議員)に譲って引退し、昭和二十三年(一九四八)五月二十三日に六十三歳でなくなりました。

晩年、市兵衛が青果市場の社長を行っていた頃のこと、清流荘(平井太郎が鹿門館を買った後、「清流荘」と変更)の三代目の主、平井栄一氏の話によると、「市場の社長をされていたときなど、売れ残った野菜などは、みんな自分が買ってきて、近所に配っておられました。」「社長が帰宅する時間ごろは、『もう市兵衛さんの帰ってきなはるころばい。』と心待ちにしている人もいたそうです。」

昭和八年 (一九三三)	山鹿町議員 (一九三五)
昭和九年 (一九三四)	野口雨情が山鹿に招かれ、鹿門館で「よへほ節」が作詞される。
昭和十一年 (一九三六)	鹿門館の隣に清滝温泉、清滝旅館(後の清流荘)を建設。
昭和十二年 (一九三七)	日華事変(日中戦争)
昭和十六年 (一九四一)	太平洋戦争が起る (一九四五)
昭和二十三年 (一九四八)	五月二十三日 六十三歳で亡くなる
昭和二十五年 (一九五〇)	鹿門館を平井太郎が買い受け「清流荘」と屋号を変更。
昭和二十九年 (一九五四)	八月十五日 中原市兵衛頌徳碑が建てられる。

おわりに

長かった戦争が終わってから九年後、市兵衛の山鹿の観光事業に対する熱意と業績に対し、山鹿の商工会議所の有志たちが中心となって彼の功績をたたえようと、昭和二十九年(一九五四)八月十五日、山鹿中央公民館庭内(現在は薬師堂前に移設)に中原市兵衛頌徳碑が建立され、彼の業績をたたえています。

山鹿温泉の名を一躍有名にした中原市兵衛は、もともと裸一貫で福岡からやってきた人でしたので、事業を行う際は、いつも資金繰りに追われていたといわれています。しかし、それかといってケチケチお金を溜め込む人ではなく無欲で、事業で儲かると、事業で還元していくという人でした。また人情家で、困った者を見ると本気になって世話をするという、義侠心の強い人であったといえるでしょう。



記念碑と説明文

近代の山鹿の偉人たち 026

山鹿温泉の発展に尽力をつくした実業家 **中原市兵衛**

平成 26 年 3 月 発行

山鹿市教育委員会 教育部 文化課

〒861-0501 熊本県山鹿市山鹿 156-3
TEL 0968-43-1691

編集

鮑本 勝徳(山鹿市教育委員会)

参考文献

「広報やまが」 「山鹿市史」
「新補山鹿市史」2004年

取材協力・写真提供

平井英智(清流荘)
藤本恵三(ジャルディン・マール望洋閣)
水町トヨコ
戸澤セツコ
古田ヒデコ